

Title	<紹介>信多純一著 『好色一代男の研究』
Author(s)	松原, 秀江
Citation	語文. 2011, 96, p. 70-72
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69174">https://hdl.handle.net/11094/69174</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 信多純一著『好色一代男の研究』

松原秀江

恩師・信多純一先生が、『馬琴の大夢 里見八犬伝の世界』（平成十七年刊）・『浄瑠璃御前物語の研究』（平成二十年刊）の二作に続き、その研究生活の掉尾を飾る三部作の最後の一冊として、同じ岩波書店から刊行した『好色一代男の研究』（平成二十二年刊）は、『一代男』の前半構想（第二章）と後半構想（第四章）の二部到大別される。その切り口と新しさは、『八犬伝』の場合同様、絵・西鶴本の挿絵にある。

元々文字をもたない日本人が、漢民族の文字である漢字（真字・真名）に接して、その存在に驚き、漢字を崩しそれを日本独自の文字として、使いこなせるようになって以来、絵巻に明らかのように、絵は特に、漢字・漢文で書かれた本来の本（ものの本・漢籍）とは違い、草子（草とも）と呼ばれる平仮名で記される物語類の作者（作品・語り手）と、文字（特に漢字）に不慣れた読者（聞き手）をつなぐ役割を担ってきた。既に云われているように、近代作家にも多大の影響を与えた西鶴の俳諧から小説への転換点をなし、日本文学史上、仮名草子に比べ、一段と文学的純度の高い浮世草子の嚆矢とされる『一代男』は、その他の西鶴浮世草子同様、当時仮名草子と呼ばれていた。そして写本から版本へ移り、平和の到来と経済力の上昇に伴って、読者層の拡大する

時代の流れの中で、儒教や仏教などの学文（漢籍）の世界をわかりやすく物語ったり、奈良絵本などの形で伝えられた中世小説の流れを引く仮名草子の世界に、挿絵が入り込むのは当然の成り行きだったろう。だが先生は、話の姿勢で書かれた俳諧師・西鶴の浮世草子の挿絵を、阿蘭陀流西鶴の転合精神による謎絵と位置づけ、西鶴浮世草子を解読する鍵と考える。

先ず第一章文と絵の中の西鶴創作法をめぐるの最初、『好色五人女』巻四第一章から五章に至る全章と、『伊勢物語』（それも諸本が多いこの作品の中でも、貞享二年京都で出版され、各地で人気を博した吉田定吉画の『首書伊勢物語』が最も近いとする）初段から五段に至る順を追った誠に詳細な相似の関係は、挿絵をヒントにしたその斬新さ故、私事で恐縮だが、三回生でたまたま演習を受講していた当時の筆者にも、驚天動地のショックを与えるのに、十分すぎる程のものであった。幾何好きだったとはいえ、それ故当時特に女性には人気のなかった江戸文学の世界に飛び込み、生涯それにかかわることになるのだから。この授業（昭42）での知見は、十年以上もたって『文学』（昭53・8）に発表され、『語文』（昭49）に発表した（この書にも載る）『西鶴織留』巻四の一や『一代男』巻三の四の論考と共に、先生に師事する多くの学生に、挿絵（絵）の面白さと有効性を確認させ、優れた学者（研究者）は優れた教育者であること、また待つこと、即ち熟成させることの大切さを、目のあたりに見せつけることになるのだが、今回は更に新たに、従来西鶴自画と云われてきた『一代男』の挿絵は、下

絵は西鶴自身によるが、西鶴以外の当時の優れた無名の絵師の手になるものと見定めて、本論に入ってゆく。

結論を云えば、『一代男』の前半は『義経記』を、後半は『曾我物語』を下敷きにし、自在に翻案して展開したとする。この説によれば、『一代男』五十四章が八巻八冊であるのも、謎とされ『源氏物語』五十四帖との関連から、その並の巻に相当すると考えられてきた六話の重複や、四十三歳から四十八歳までの六年（六話）の欠落も、義経の死に重ねて翻案した世之介三〇歳の章を、巻四の第六章（終章）にする第一次構想があったとすることで解決する。そして当初は『一代男』の後半を、義経を取り巻く女性達の物語である『義経記』後日のように、三都の名妓を絡めて描くことを意図したにもかかわらず、その構想の不備に気づき、近世の文化・文学に多大の影響を与え、愛された同じ中世の軍記物の中でも、集団の戦闘を描く『平家物語』や『太平記』とは違い、個人の生涯を描く『義経記』同様の『曾我物語』に目を付け、その順序には忠実につくが、感興の趣くまま自在に筆を振ったと述べている。そしてたとえば、『曾我物語』巻一の一「神代はじまりの事」と、『一代男』巻五の三の冒頭、「本朝遊女のはじまりは……」と続く文章などの類似点だけでなく、巻五の六の本文では三十九歳の世之介が、挿絵では前髪立の少年であることに注目し、『曾我物語』の主人公が十郎・五郎の二人であることから、先述の六話の重複などにも及んでゆく。

『義経記』（及びその関連作）を『一代男』の原拠として初めて

発表したのは、昭和四十年秋の日本近世文学会でのこと。それ以後温め続けて、この書の刊行される平成二十二年まで、四十五年もの時間が流れている。再び私事を許されるなら、その四十五年前大学に入ったばかりの筆者は、大学でのそれまでの授業との違いに、どんなに驚いていただろう。先ずは中学・高校で習い、すっかり暗記していた橋本文法とは全く違う、難解な森重文法の世界。そして高校の授業にも参考書にも欠けていた、聞いたことも見たこともない先生の中世を中心にした日本文学史の講義。新進気鋭の学者と学生たちが囁き合っていた先生の講義は、片仮名で記すのが精一杯で、授業が終るといつも図書館に駆け込み、その片仮名を漢字に直したものが、この書の特徴として先ず第一にあげなければならないのは、この書があとがきにもあるように、『神道集』の諸本研究に没頭し、本地物に関する文芸の翻刻に、その生涯を捧げた横山重氏の薫陶のもと、現在主に近松をはじめ、浄瑠璃や説教研究の第一人者として、国文学にかかわる研究者なら、知らぬ人のない先生の手になるものだということである。

そして諸本の厳密な翻刻は、先ずは何と云っても原本主義。四十五年も前、西欧の文学に比べ、日本文学は一段低いものと考えられ、西欧の思想で切り込む暉峻康隆氏や広末保氏の、評論と云われる論考が、脚光をあびていた。その驚くべき才能には敬意を払いつつ、日本文学は日本人にふさわしい、しかも夫々の時代や場所が作り出す日本に固有の論理で、という切実な願いから、本時代に入って資料も多い近世を中心に、先生の恩師でもある野

間光辰氏らに先導され、『國書総目録』も刊行される中、多くの新進気鋭の研究者が、カメラやライト、三脚などをさげて全国を飛び廻り、やがて国文学研究資料館の設立へと向ってゆく。

そんな時代の流れの中で、文学は永遠のものとして信じて文学部に入り、中でも古典はと想っていたその古典の本文が、読み本・語り本のざらりと並ぶ、先生の『平家物語』諸本の本文校異の授業で、動くのを目の当りにした時のショックは、今も忘れない。だからだからこそ、本書を拝読して、『一代男』や『義経記』・『曾我物語』は勿論、中世から近世へと流れ込むこの時代の多くの舞や謡曲・節用集など、心のアンテナを高く掲げて、志水文庫の文庫主でもある先生の、水のように透明で無欲な心の趣くまに、博搜した様々な関連資料との実に細やかで丁寧な本文や挿絵の比較は、流石と深く納得されるのである。本文に齟齬する挿絵の図柄や場所、その丁付に至るまで注目し疑問を抱いて、その疑問に忠実に従い、博搜に博搜を重ね、とことん調べ上げて、作品解説の鍵にすること自体、他人の手や意識を潜らない、真っさらで厳密な原本主義の賜物であること、改めて云うまでもないだろう。

しかもこの時代の書籍目録も含む書物を虚心坦懐に見るなら、誰しも時代は近世なのに、中世から流れ込む仏教的色彩の強さに驚くだろう。それを先生は、説教や浄瑠璃研究の第一人者にふさわしく、本地物の世界ととらえ、『一代男』の謎を解いてゆく。そのあざやかさは、『京童』の二図を『一代男』の粉本とした野間氏の説を引き継ぎ、更に十三図も指摘して、『年代記新絵抄』

や『女用訓蒙図彙』など、当時の雑書に至るまで縦横に駆使して、巻一の一から五に至る挿絵の世之介が、垂直的に移動することから、天からの「降り人」、神の人界への降臨と見立てる部分など、脱帽以外の何ものでもない。そしてこの巻頭部分に呼応し、『一代男』の最終章、この世の遊女を見尽した世之介が、長崎の丸山に遊び、やがて好色丸で女護の島へと船出する巻八の第四・五章は、『江戸雀』や『京童』、更にまた『俳諧類船集』や『長崎土産』などに見られる大仏図やめやみ地蔵、長崎の菩薩祭などに類似し似かような挿絵の図柄から、極楽浄土への旅立と考察する。

『一代男』が、中世の二大文学・『義経記』や『曾我物語』を粉本にし、本地物の世界にかかわると指摘する本書の主旨は、おそらく動かないだろう。これからの『一代男』研究の礎になると思われる。そしてそのような成果も、四十五年もの間論文発表もさし控え、熟慮・熟成の末に今ようやく本書を刊行した先生の、待つことを嫌わない無欲で堅実な粘り強さと、ポーナスは本代にと願う先生の志を受け入れ、その学者としての生き方を支え続けた奥様の献身的な愛情の賜物であること、云うまでもない。まただからこそ、先生自らが畏友と讃える人達や、先生に幸運をもたらした多くの優れた人々、そして更に貴重な資料にも、思いも寄らず巡り会えたのだと思われる。

(岩波書店、二〇一〇年九月、二五〇頁、八六一〇円)

(まつばら・ひでえ 大手前大学教授・兵庫県立大学名誉教授)